



TITLE:

京大広報 No. 556

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 556. 京大広報 2001, 556: 1047-1070

ISSUE DATE:

2001-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196551>

RIGHT:



京大広報

No. 556

2001 4



目次

大学の動き

副学長の交替.....1048

部局長の交替等.....1048

「第1回京都大学国際シンポジウム」の報告...1051

部局の動き

食糧科学研究所の廃止に伴う報告.....1052

安部・東・中野博士を偲ぶ会.....1053

日誌1053

訃報1054

紹介

京都大学大学文書館.....1057

保健コーナー

データで見る学生の生活像.....1058

随想

日本の木とシリカ粒 名誉教授 佐伯 浩...1061

資料

平成12年度京都大学教育研究振興財団

助成金交付決定者一覧.....1061

話題

生態学研究センター

センター内公開・講演会

「『生態学って何?』の開催.....1068

公開講座

京都大学春秋講義(春季講座).....1069

終了報告

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター

第4回リカレント教育講座

「『心の教育』を考える

衝動的な子どもたちを巡って」.....1070

京都大学広報委員会

大学の動き

副学長の交替

宮崎 昭副学長の任期満了に伴い、その後任として尾池和夫理学研究科教授（地球惑星科学専攻固体地球物理学講座担当）が、4月1日副学長に任命された。任期は平成13年12月15日までである。



部局長の交替等 （新任）

総合人間学部長

林 哲介総合人間学部長の任期満了に伴い、その後任として宮本盛太郎総合人間学部教授（人間学科生活空間論講座担当）が、4月1日同学部長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。



法学研究科長・法学部長

中森喜彦法学研究科長・法学部長の任期満了に伴い、その後任として木村雅昭法学研究科教授（政治学専攻比較政治学講座担当）が、4月1日同研究科長・同学部長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。



文学研究科長・文学部長

礪波 護文学研究科長・文学部長の任期満了に伴い、その後任として金田章裕文学研究科教授（行動文化学専攻地理学講座担当）が、4月1日同研究科長・同学部長に任命された。任期は平成14年3月31日までである。



理学研究科長・理学部長

丸山正樹理学研究科長・理学部長の任期満了に伴い、その後任として加藤重樹理学研究科教授（化学専攻理論化学講座担当）が、4月1日同研究科長・同学部長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。



教育学研究科長・教育学部長

竹内 洋教育学研究科長・教育学部長の任期満了に伴い、その後任として山中康裕教育学研究科教授（臨床教育学専攻心理臨床学講座担当）が、4月1日同研究科長・同学部長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。



医学部附属病院長

本田孔士医学部附属病院長の任期満了に伴い、その後任として田中紘一医学研究科教授（外科系専攻移植免疫医学講座担当）が、4月1日同病院長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。



農学研究科附属演習林長

渡辺弘之農学研究科附属演習林長の任期満了に伴い、その後任として大畠誠一農学研究科附属演習林教授（森林育成学）が、4月1日同演習林長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**木質科学研究所長**

兼原正章木質科学研究所長の任期満了に伴い、その後任として則元 京木質科学研究所教授（木質バイオマス研究部門担当）が、4月1日同研究所長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**人間・環境学研究科長**

豊島喜則人間・環境学研究科長の任期満了に伴い、その後任として江島義道人間・環境学研究科教授（人間・環境学専攻環境情報認知論講座担当）が、4月1日同研究科長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**ウイルス研究所長**

伊藤嘉明ウイルス研究所長の任期満了に伴い、その後任として伊藤維昭ウイルス研究所教授（細胞生物学研究部門担当）が、4月1日同研究所長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**情報学研究科長**

池田克夫情報学研究科長の任期満了に伴い、その後任として茨木俊秀情報学研究科教授（数理工学専攻応用数学講座担当）が、4月1日同研究科長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**経済研究所長**

藤田昌久経済研究所長の任期満了に伴い、その後任として佐和隆光経済研究所教授（数量産業分析研究部門担当）が、4月1日同研究所長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**生命科学研究所長**

大山莞爾生命科学研究所長の任期満了に伴い、その後任として柳田充弘生命科学研究所教授（統合生命科学専攻遺伝機構学講座担当）が、4月1日同研究所長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**数理解析研究所長**

森 正武数理解析研究所長の任期満了に伴い、その後任として柏原正樹数理解析研究所教授（基礎数理研究部門担当）が、4月1日同研究所長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。



体育指導センター長

三好郁朗体育指導センター長の辞任に伴い、その後任として尾池和夫理学研究科教授（地球惑星科学専攻固体地球物理学講座担当）が、4月1日同センター長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**留学生センター長**

三好郁朗留学生センター長の辞任に伴い、その後任として鈴木健二郎工学研究科教授（機械工学専攻熱流体工学講座担当）が、4月1日同センター長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**放射性同位元素総合センター長**

寺島 泰放射性同位元素総合センター長の任期満了に伴い、その後任として五十棲泰人放射性同位元素総合センター教授（原子核及び原子物理学）が、4月1日同センター長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**生態学研究センター長**

中西正己生態学研究センター長の任期満了に伴い、その後任として山村則男生態学研究センター教授（寒帯生態研究部門担当）が、4月1日同センター長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**環境保全センター長**

竹内賢一環境保全センター長の任期満了に伴い、その後任として橋本伊織工学研究科教授（化学工学専攻化学システム工学講座担当）が、4月1日同センター長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**国際融合創造センター長**

国際融合創造センターの新設に伴い、松重和美工学研究科教授（電子物性工学専攻機能物性工学講座担当）が、4月1日国際融合創造センター長に任命された。任期は平成15年3月31日までである。

**（再任）****経済学研究科長・経済学部長**

本山美彦経済学研究科教授（経済動態分析専攻比較制度・政策講座担当）が、4月1日経済学研究科長・経済学部長に再任された。任期は平成14年3月31日までである。

基礎物理学研究所長

益川敏英基礎物理学研究所教授（素粒子論研究部門担当）が、4月1日基礎物理学研究所長に再任された。任期は平成15年3月31日までである。

原子炉実験所長

井上 信原子炉実験所教授（応用原子核科学研究部門担当）が、4月1日原子炉実験所長に再任された。任期は平成15年3月31日までである。

霊長類研究所長

小嶋祥三霊長類研究所教授（行動神経研究部門担当）が、4月1日霊長類研究所長に再任された。任期は平成15年3月31日までである。

保健管理センター長

川村 孝保健管理センター教授（内科学・疫学）が、4月1日保健管理センター長に再任された。任期は平成15年3月31日までである。

大型計算機センター長

鈴木健二郎工学研究科教授（機械工学専攻熱流体工学講座担当）が、4月1日大型計算機センター長に再任された。任期は平成15年3月31日までである。

放射線生物研究センター長

丹羽太貫放射線生物研究センター教授（晩発効果研究部門担当）が、4月1日放射線生物研究センター長に再任された。任期は平成15年3月31日までである。

総合情報メディアセンター長

富田眞治情報学研究科教授（通信情報システム専攻コンピュータ工学講座担当）が、4月1日総合情報メディアセンター長に再任された。任期は平成15年3月31日までである。

総合博物館長

瀬戸口烈司理学研究科教授（地球惑星科学専攻地球生物圏史講座担当）が、4月1日総合博物館長に再任された。任期は平成15年3月31日までである。

「第1回京都大学国際シンポジウム」の報告

1月13日、米国カリフォルニア州サンタクララのマリオットホテルにて標記のシンポジウムが開催された。この国際シンポジウムは、京都大学の研究者が直接、海外に出かけ最新の研究を紹介し、国際的なレベルの外国人研究者と討論することにより、京都大学が21世紀の世界に貢献することを目的としている。そのキックオフである今回は、ITとそのベンチャービジネスの中心であるシリコンバレーにおいて「ネットワークとメディアコンピューティング」という副題のもと情報学研究科の教官が中心となって開催された。この企画が国際交流委員会で検討されていた昨年の春頃は、情報学以外に、経済学、物理学、医学及び化学等の分野が候補に上がったが、米国西海岸で開催するということから情報学が選ばれた。その後、情報学研究科の池田克夫研究科長、上林弥彦教授等を中心とする実行委員会のもとで精力的に準備が進められ、このたび無事に終了するとともに予想以上の成果を挙げることができた。

当初、心配されたのは当日の参加者数であった。むろん、できる限り早い機会に案内ポスターやプログラムを配布し、京都大学のホームページにもそれらを掲載したが、初めて海外で行う京都大学の行事



がどれだけ有効に広報されるかは想像できなかった。しかし、直前になって当初の目標であった150人を大きく上回る274人の参加登録のあることがわかり、安心すると同時に当日の配布資料の準備や会場設営の修正等について事務局が頭を抱えるという場面もあった。実際には、京都大学関係者35人を含む236人が参加した。

午前9時30分のシンポジウム開始時には会場はほとんど満席になり、長尾 真総長の講演で最初のセッションが始まった。講演は、英語で次のとおり行われた。

Kyoto University Appeals to the World in the 21st Century

(21世紀の世界に向けての京都大学の主張)

長尾 真(京都大学総長)

3D Video: Realtime Active 3D Visualization of Human Body Actions

(3次元ビデオ:身体動作の能動的実時間3次元映像化)

松山隆司 / Larry Davis (Univ. of Maryland)

Trans Pacific Interactive Distance Education (TIDE) Project

(太平洋を結ぶ対話型遠隔教育:TIDEプロジェクト)

美濃導彦 / Maha Ashour-Abdalla (UCLA)

Toward the Promotion of Science in the 21st Century

(21世紀における学術振興を目指して)

佐藤禎一(日本学術振興会理事長)

Social Agents and Digital Cities: Research and Design

(社会的エージェントとデジタルシティ:研究と設計)

石田亨 / Clifford Nass (Stanford University)

セッションの合間に設けた展示では参加者が惹きつけられ、休憩後、パネル討論会場へ呼び戻すのが憚られるほどであった。またこのシンポジウムが、単なる研究発表ではなく、外国人研究者と共同でセッションを構成したことや、研究内容がそのまま理

解できるような展示をしたことが好評であった所以であろう。さらに、NSF(National Science Foundation)の情報部門のMichael Lesk部長には、パネルディスカッションの企画と司会を担当するなど、全面的な協力を得たことも遠因であろう。

短期的な目標は別にして、このような国際シンポジウムがいかんにして長期的な成果に結びつくかは容易に予測できない。しかし、大学として世界に向けた情報発信はますます必要性を増すと思われる。毎年、このような形式で継続していくには多くの課題が残されているが、たとえ小規模であっても京都大学を世界にアピールし続けていくことは重要である。

ところで、このシンポジウムについては日本学術振興会から特別の助成を受け共催という形式をとっていただいたうえに、佐藤禎一理事長自ら参加され、日本の科学技術行政に関するご講演をいただいた。この第1回国際シンポジウムに、発表者・パネリストとしてご参加いただいた外国人研究者、ご支援いただいた日本学術振興会の方々、運営開催にあたり多大の貢献をされた情報学研究科の教官各位、事務局を担当された研究協力部職員の方々、展示会場の補助として活躍した学生諸君、そして当日シンポジウムに参加された皆様にここに厚く御礼申し上げます。

なお、第2回国際シンポジウムは、今秋にロンドンにて経済学をテーマに開催される予定で、準備が進められている。(国際交流委員会)

部局の動き

食糧科学研究所の廃止に伴う報告

食糧科学研究所は、昭和21年9月、食糧の生産、加工、利用及び貯蔵に関する研究を目的として設置され、4研究部門体制(食糧貯蔵加工、食糧化学、応用遺伝学、応用微生物)で発足した。設立当初は食糧難の時代を反映して食糧事情の打開、改善を図るための応用研究に重点が置かれたが、その後事情が好転するにつれて、より基礎的な学術研究に軸足を移していった。その間、たんばく食糧研究部門の増設(昭和29年)、大学院学生の受入(昭和38年)、



食品分析（昭和42年）、食糧安全性（昭和51年、時限7年）、食品プロセス（昭和58年、時限10年）、地域伝統食品（客員部門、昭和62年、時限10年）、新食品設計（平成5年、時限10年）の各研究部門の増設があった。

設置以来、このように食糧に関する応用並びに基礎研究の分野で常に先導的役割を果たすとともに優れた実績を積み一方で、時代の変化による新たな学術研究の動向や社会的要請に適切にこたえるように、絶えず研究の理念と研究組織体制のあり方について検討を重ねてきた。そして、平成7年度の改組により、3大部門（食糧生産環境、食品構造機能、食糧設計利用）、9研究分野（機能食糧、微生物分子育種、食糧環境（外国人客員）、食品分子構造、食品機能調節、食品感覚特性、分子食糧、新食糧設計、食糧安全利用）の体制となった。

平成7年度の改組に先立って平成5年度から自己点検評価を始め、ついで、国際的及び国内的の外部評価を実施し、研究所の活性化に努めてきた。そして、平成11年度からは、「食糧科学研究の将来発展像」についての議論を本格的に始めた。これらの点検・評価・議論から、21世紀を見据えた食糧科学の新たな長期的課題が提示されるとともに、思いきった新たな組織体制づくりを目指しつつ将来計画の策定を推進する必要があるとの考えが大勢を占めるに

いたった。

具体的には、研究所を廃止し同時に農学研究科に統合する計画であり、平成13年度概算要求として提出された。これにより、食糧科学の研究・教育活動は中断あるいは消滅することなく継承されるとともに、専門の諸分野が連携した領域横断型で統合的な「食料」の研究を推進することができると考えている。さらに、「食料」の課題への対処には多数の専門分野の研究者を必要としているが、新たな組織体制の下では、大学院並びに学部での教育に携わることにより、必要な人材の育成、輩出が行われるものと期待できる。

この度、平成13年度概算要求が認められるにいたり、食糧科学研究所では3月12日（月）午後3時から京都ホテルにおいて学内外からの関係者約250人が出席して研究成果報告会並びに懇談会を開催した。報告会では、宮崎 昭副学長の挨拶、文部科学省遠藤昭雄研究振興局長のメッセージ、松野隆一農学研究科長、全学所長会議世話部局山岡義生再生医科学研究所長の挨拶の後、研究成果報告の発表が行われた。その後、懇談会が行われ、宮崎副学長、文部科学省研究振興局清木孝悦学術機関課長の挨拶があり、和やかな歓談のひと時を楽しみ、盛況のうちに幕を閉じた。

（食糧科学研究所）

安部・東・中野博士を偲ぶ会

去る平成12年3月27日メキシコ湾で水難事故のため逝去された安部琢哉教授、東 正彦教授、中野繁助教授を偲ぶ会が生態学研究センターの主催によ

り、3月18日（日）午後1時から5時30分まで、農学部W 100講義室において執り行われた。

（生態学研究センター）

日誌 2001.2.1 ~ 2.28

2月8日 フランス共和国 Michel HOFFERT ルイ・パスツール大学副学長他4名来学、総長及び関係教官と懇談
13日 評議会

13日 自己点検・評価委員会
21日 国際交流委員会
25日 入学者選抜学力試験（前期日程試験）（26日まで）

2月27日 評議会

〃 王泰平 中華人民共和国駐大阪総領事他
3名来学，総長及び関係教官と懇談

訃報

このたび、田中正武^{たなかまさたけ}名誉教授、田中哲郎^{たなかてつろう}名誉教授、初田^{はつだ}甚一郎^{じんいちろう}名誉教授、田畑^{たばたしげ}茂二郎^{じろう}名誉教授、小島^{こじま} 衛^{まもる}名誉教授、石崎^{いしざき} 潑^{はつお}雄^お名誉教授、大塚^{おおつか} 美^み和^わ子^こ医学部附属病院文部科学技官が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴，業績等を紹介します。

田中 正武 名誉教授



田中正武先生は，2月13日逝去された。享年80。

先生は昭和22年京都帝国大学農学部農林生物学科を卒業後，農学部助手，同講師，同助教授を経て，同46年農学部附属植物生殖質研究施設教授に就任，栽培植物起原学部門を担当された。昭和59年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は，横浜市立大学木原生物学研究所教授，同研究所長，（財）木原記念横浜生命科学振興財団常務理事，同財団顧問を歴任された。

先生の専門は栽培植物起原学であり，とくにコムギの起原についてはコムギとその近縁種のゲノム分析，四倍性野生コムギの細胞遺伝学的研究を通して

コムギの系統分化を明らかにされた。コムギおよび近縁野生種の遺伝資源を求めて，東地中海地域，トランスコーカサス，メソポタミア北部高地，トルコ東部で現地調査を行い，膨大な植物遺伝資源を収集し，それらを研究するとともに系統保存に大きな功績を残された。

先生はまた，新大陸の栽培植物にも興味をもたれ，4回にわたり調査隊を組織して新大陸の栽培植物とその近縁野生種の調査と収集を行い，新大陸の遺伝資源の探索と系統保存に貢献された。

研究成果は著書『栽培植物の起原』としてまとめられ，この分野への貴重な入門書となっている。

これら一連の功績により，平成6年11月勲三等旭日中綬章を受けられた。

（大学院農学研究科）

田中 哲郎 名誉教授



田中哲郎先生は，2月20日逝去された。享年84。

先生は，昭和14年京都帝国大学工学部電気工学科を卒業，北辰電機製作所に勤務後，京都帝国大学大学院（工学部）で学ばれ，同18年化学研究所講師，同助教授，同教授を経

て，同38年，京都大学工学部教授に就任，電気工学第二学科半導体工学講座を担当された。昭和54年詫間電波工業高等専門学校長に就任され京都大学名誉教授の称号を受けられた。昭和62年同校校長を退官された。

先生は，電子材料工学，中でも強誘電体，半導体材料に関して，新規材料の創製，物性の解明，電子

デバイスへの応用などに優れた業績を上げられた。特に、「強誘電体チタン酸バリウム」の基礎と応用の研究に関しては、その創始者であり、日本におけるこの分野の中心として、長く、学界、産業界を指導された。

また、電気学会、電子情報通信学会、音響学会、チタン酸バリウム実用化研究会、強誘電体応用会議

などの会長、委員長、支部長などの役員を歴任し、わが国の電子材料工学とその関連分野における学術技術の振興に多大の貢献をされた。

これら一連の功績により、昭和62年4月勲二等瑞宝章を受けられた。

(大学院工学研究科)

初田 甚一郎 名誉教授



初田甚一郎先生は、3月6日逝去された。享年95。

先生は、昭和6年京都帝国大学理学部地質学鉱物学科を卒業、同大学大学院(理学部)で学ばれた後、同9年京都帝国大学理学部講師、京都大学助教授を経て、同36年教授に就任、物理地質学講座を担当された。昭和44年停年により退官され、同49年京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、嵯峨美術短期大学教授を務められた。

先生の専門は、物理地質学全般にわたるが、特に岩石磁気学の研究をされた後、自然放射能の研究に進まれ、その分野で優れた業績を残された。自然放射能の研究分野では、独創的な放射能測定機器の製

作、実験方法の考案をなされ、地質学の研究に適用された。特に、活断層の探査に地中空気や地下水中のラドンの測定に考案された機器・実験方法を適用することを世界に先駆けてなされた。また、岩石中の微量のラジウムの測定法を考案され、多くの岩石のラジウム量を求められた。一方、京都大学原子炉を用いた岩石の放射化分析法の開発に努力され、現在のフィッシュン・トラック法に続いている等幾多の業績をあげられた。

また、日本物理探鉱技術協会委員長、日本温泉科学会会長、日本測地学会委員、京都府温泉審議会委員などを歴任され、学術と社会の発展に多大の貢献をされた。

これら一連の功績により、昭和51年11月勲三等瑞宝章を受けられた。

(大学院理学研究科)

田畑 茂二郎 名誉教授



田畑茂二郎先生は、3月8日逝去された。享年89。

先生は、昭和9年京都帝国大学法学部を卒業後、同大学助手、講師、助教授を経て、同20年同大学教授に就任、国際法講座を担当された。昭和40年から2年間法学部長を務められ、同49年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。その後昭和49年から55年まで

京都府立大学長、同56年から62年まで京都芸術短期大学長を務められた。この間、昭和55年に日本学士院会員に選ばれた。

先生は、国際法思想史の研究を基礎に、近代国際法の歴史的な性格と社会的基盤を明確にするとともに、現実の変動する国際社会への国際法の妥当の態様を実証的に分析した、精緻で強い説得力をもつ「田畑国際法学」と呼ばれる学風を打ち立てられた。その研究は、国家平等思想や国家主権、そして人権

の国際的保障などを中心として、枚挙にいとまがなく、またその理論体系は版を重ねた国際法の教科書に示されている。また直接間接に先生の教えを受けて、有為の人材が輩出している。学外にあって国際法学会理事長、日本学術会議第二部長、その他の要職を務められ、近年はその設立に尽力された世界

人権問題研究センターの所長を務められていた。

これら一連の功績により、昭和56年11月勲二等旭日重光章を受章され、平成2年京都府文化賞特別功労賞、同9年度文化功労者の栄誉を受けられた。

(大学院法学研究科)

小島 衛 名誉教授



小島 衛先生は、3月13日逝去された。享年72。

先生は、昭和27年京都大学文学部文学科を卒業、同大学大学院(文学部)で学ばれた後、専修大学専任講師、北海道大学専任講師、同助教授、京都大学教養部助教授を経て、同51年同教授に就任、独語を担当された。平成4年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、日本大学と横浜商科大学の非常勤講師をされ、京都大学以外でも学生の教育、後進の

研究指導にあたってこられた。

先生のご専門は、19世紀末から現代に至る抒情詩を中心とするドイツ文学で、なかでもR・M・リルケ、W・ヒルデスハイマー、H・E・ノサック等の研究において、数多くの優れた研究業績を残された。主な著書に『リルケ名詩選』、『ミュンヘンの光と影の中で』等がある。特に共訳の『リルケ全集』(河出書房新社)では、日本翻訳出版文化賞を受けられた。

先生は、日本独文学会、日本比較文学会、世界文学会、京都ドイツ文学会などの学会において活躍され、特に日本独文学会では京都支部長を務められた。

(総合人間学部)

石崎 潑雄 名誉教授



石崎潑雄先生は3月17日逝去された。享年79。

先生は、昭和19年東京帝国大学第一工学部航空学科を卒業後、川西航空機会社入社、軍務に服した後、同22年京都帝国大学大学院(工学部)で学ばれ、神戸大学神戸工業専門学校教授、神戸大学工学部助教授、京都大学防災研究所助教授を経て、同34年に京都大学防災研究所教授に就任、耐風構造部門を担当された。昭和44年から2年間防災研究所長を務められ、同60年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、近畿大学教授として勤務されるとともに、平成4年より(財)防災研究協会理事長を

務められた。

先生は、構造物を地震や強風から護るため、地震力や風力が構造物に及ぼす影響を、潮岬風力実験所等での強風観測や鳥取、福井地震、宮古島台風、第二室戸台風などの被害調査を通して解明され、日本の耐震・耐風構造設計の発展に大きく寄与された。それらの成果は、日本初の超高層建築物である霞が関の耐震・耐風設計に活かされた。

先生は昭和57年に日本風工学会を設立され、初代会長として日本における風工学の発展のために尽力された。

これらの一連の功績により、平成7年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

(防災研究所)

大塚 美和子 医学部附属病院文部科学技官

大塚美和子氏は、3月17日逝去された。享年51。
同氏は、昭和50年7月から医学部附属病院薬剤部

に勤務され、以来25年余りの永きにわたって薬剤部の業務に尽力された。（医学部附属病院）

紹介

京都大学大学文書館

平成12年11月1日、京都大学大学文書館が設置されました。

大学文書館の主な仕事の一つは、各部局で作成され保存年限の経過した文書を受け入れ、そのうち将来に有用と思われるものを選択・保存し、大学関係者だけでなく広く京都大学に関心のある人々に公開・利用していただくことにあります。もう一つは、収蔵する大学行政文書だけでなく京都大学を考えたうえで必要な資料を広く収集し、それらを分析・研究することを通じて、大学の自己点検や将来計画の策定に寄与し、さらに広く京都大学あるいは近代の高等教育の歴史を明らかにしていくことにあります。

今年4月以降当面の大学文書館の仕事は、各部局から移管される文書を受け入れることと、百年史で収集された資料の閲覧・利用に向けての整理が主たる仕事となります。2年後には、京都大学百周年記念時計台記念館が完成の暁には、大学文書館もそのなかに入る予定です。それを機に一般利用を開始し、京都大学に関する展示を行い、また京都大学に関する歴史的情報を様々な形で提供することを考えております。それまで大学文書館は附属図書館に間借りし、移管される文書は当面楽友会館等に収蔵し、利用・公開に向けての準備作業をしていきます。なお、事務は総務部総務課が担当します。

大学文書館設立の要請は、大きくは二つの方面から出されてきました。第一は、平成13年4月1日から施行される情報公開法と関連してのものであり、第二は、平成2年以来続けられてきた京都大学百年史の編纂にともなうものです。

情報公開法との関連では、平成10年4月には情報公開検討ワーキンググループが設置され、京都大学

における情報公開のあり方の検討が開始されました。ついで平成11年5月14日に「行政機関が保有する情報の公開に関する法律（情報公開法）」が公布され、翌年2月10日の政令でその施行が平成13年4月1日と決定されるなか、情報公開検討ワーキンググループから、平成12年9月12日に総長への答申がなされました。そこでは、情報公開法に対応する文書の保存規定、管理簿の作成とともに、保存年限を過ぎた行政文書のうち学術的価値の高い文書を保存するために「大学文書館（仮称）」を整備することが求められました。

一方、百年史編集との関連では、編集が始められた当初から、百年史編集終了後の収集資料の保存・活用が話題となり、資料編が編集され始めたころには編集後は恒常的な組織が必要であるとの共通した認識がもたれるようになりました。百年史完成を間近に控え、平成12年3月9日、百年史編集委員会での決定を受け、委員長より「本学の歴史に関する史料の収集・保存・公開について（要望）」が総長に出されました。そこでは、将来の年史編集事業への備えとともに、収集されてきた資料の学術的価値の高さ、さらにこうした史料を体系的に研究することによって大学の置かれた位置を点検し、将来の発展に資するであろうとの観点から、本学の歴史に関する史料を収集・保存・公開し、それにもとづいた研究・教育活動を行う恒久的な組織が速やかに設置されることが要望されました。

この百年史編集委員会からの要望を受けて平成12年4月4日、京都大学の歴史に関する史料の収集・保存・公開のための組織についてのワーキンググループが総長のもとに設置され、情報公開検討ワーキ

ンググループの答申をも踏まえて、同年10月16日に総長に報告がなされ、それに基づき、10月24日の部局長会議において大学文書館の11月1日の設置が決定されました。設置にあたって佐々木丞平文学研究科教授が館長に、平成13年1月1日に文学研究科教授藤井が併任教授に、3月1日に百年史編集史料室の西山 伸助手が専任助教授に就任しました。また、専任の助手2名も採用しました。

大学文書館としては全国で初めての組織であり、この大学文書館をどのようなものとしていくかは試行錯誤を繰り返さねばならないと思います。多くの方々のご意見やご助言をいただき内容豊かで意味のある大学文書館にしていきたいと考えておりますので、ご協力方よろしくお願いいたします。

(大学文書館教授 藤井 譲治)

保健コーナー

データで身の学生生活像

健康に対する意識が高まっているとはいえ、それを意識して生活している学生は多くはないであろう。高校までのような規制された生活とは違って生活は自主性に任されており、お酒やたばこを始めるのも多くはこの時期である。

保健管理センターでは、定期健康診断の電算化に伴い、平成12年度から問診票で症状や病歴とともに生活習慣を訊ねている。そのデータを集計して、学生がどのような生活を送っているのかをまとめた。学年分類がしにくい留年生を除く学部学生11,251人(男子9,107人、女子2,144人)について、基本的な生活習慣に関する多肢選択式回答の分布を分析した。なお、回答時期は2000年4月であり、1回生には入学までの生活を聞いた。

喫煙

図1に学年・男女別の現在喫煙者の割合(いわゆる喫煙率)を示した。京都大学の学部学生の喫煙率は全体で12.0%(1,355人)であったが、1回生(男子3.0%、女子0.6%)に比べ2回生(男子12.7%、女子1.7%)で大きく上昇する。3回生以上では割合はさらに高くなり、4回生では男子21.6%、女子3.8%に達する。5年前の健診時に行ったライフスタイル調査では、男子1回生が4.0%、同2回生が10.1%、女子1回生が1.0%、同2回生が1.4%であったので、入学後の喫煙習慣の獲得が少し増えたかもしれない。文系と理系で比較すると、男子では文系

が17.1%、理系が13.3%、女子では文系が3.5%、理系が0.9%と、文系の学生の方が喫煙割合が高かった。

では、たばこを吸う人は1日にどのくらいの本数を吸っているのだろうか? 男子の喫煙者では数本吸う人が31.2%、10本程度吸う人が31.4%、20本程度吸う人が32.8%、30本程度吸う人が3.8%、30本以上吸う人が0.8%であった。女子の喫煙者では順に53.8%、38.5%、7.7%、0%、0%であり、喫煙しても男子より本数が少ない傾向にあった。

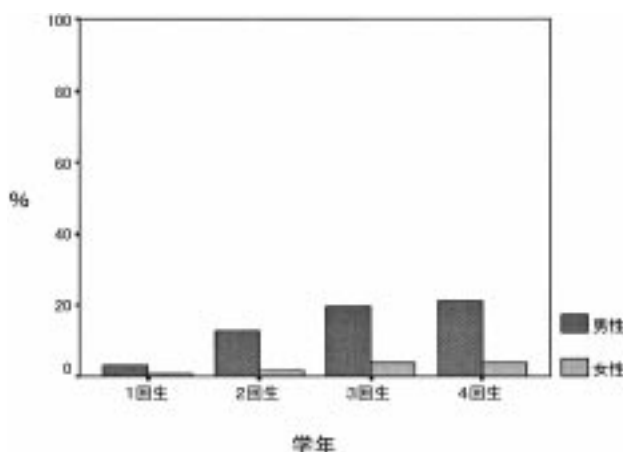


図1 喫煙者の割合

飲酒

時々飲酒と毎日飲酒を合わせた飲酒者の割合(図2)も、喫煙と同様、1回生(男子26.2%、女子12.2%)と2回生(男子64.9%、女子51.7%)の間に大きな差があり、定常状態となる3~4回生では男

子が約70%，女子が約60%であった。なお飲酒者の割合に文理による差はほとんどなかった。

お酒を飲む人には、飲む量についても質問した。一度に飲む量は、男子ではビール大瓶に換算して1本未満が56.4%，1～2本が32.8%，2本以上が10.8%，女子ではそれぞれ75.6%，21.9%，2.5%と、男子学生の方が多量飲酒者が多い。

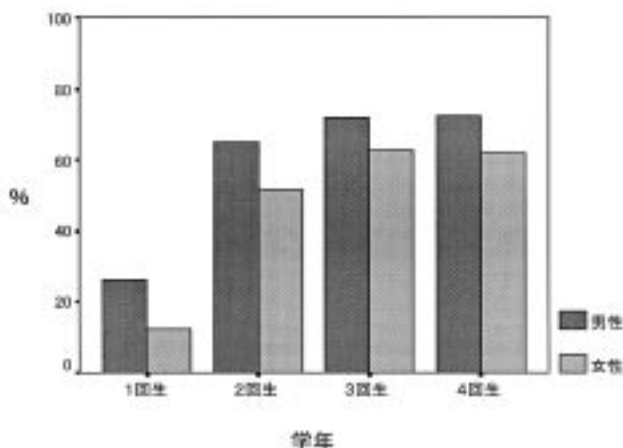


図2 飲酒者の割合

睡眠

図3には睡眠時間の分布を示した。6～7時間が48.0%，7～8時間が30.8%で、6時間未満という短時間睡眠の人も10.7%いた。なお睡眠時間の分布に男女や学年による著しい差異は認められなかった。

睡眠時間と合わせて就寝時刻に関しても質問したところ、午後11時から午前1時に寝る人が多い(72.9%)が、午前2時頃の人19.7%(男子21.0%・女子13.7%)、午前3時頃の人5.0%(男子5.6%・女子2.1%)もいた。1限目の授業に出てこ

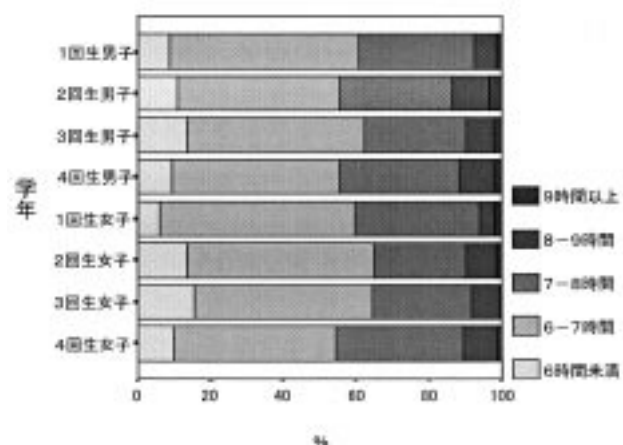


図3 睡眠時間の分布

ない人が多いこともうなずける。

住まい

図4は、学部生の居住状況の分布である。1回生(入学以前)は親と同居する割合が高い(男子72.2%・女子81.1%)が、2回生では一人暮らしが男子の66.0%，女子の66.5%と3分の2を占めた。その割合は高学年ではさらに高まり、4回生では75%近い。なお、文系・理系の差はほとんどなかった。

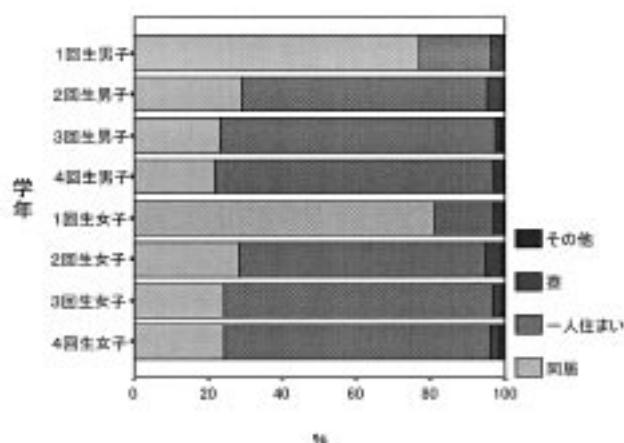


図4 居住状態の分布

食事

食習慣も1回生から2回生にかけて変化する。図5は夕食の夕食、図6は朝食の欠食の状況を示したものである。

1回生(入学以前)は、男子の81.1%，女子の89.3%が夕食の夕食頻度が週1回以下で、夕食する人は少ない。しかし、2回生になると週2～4回と週5回以上夕食する人の合計は、男子の66.4%，女子の51.2%になる。4回生にもなると夕食頻度が週5回以上という学生が男子で27.0%に達しているが、一人暮らしが多いにもかかわらず、皆が毎日のように夕食しているわけではない(自炊している? 買ってきて食べる?)と読むべきなのだろうか。

1回生男子の79.8%，女子の88.4%はほぼ毎朝食事をしていたが、2回生以上の学生では欠食頻度が高くなり、4回生になると男子の20.3%が朝はほとんど食べていない(女子は5.8%)。

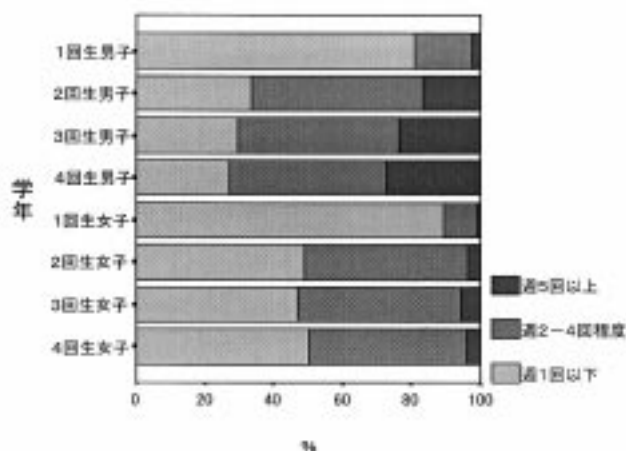


図5 外食状況の分布

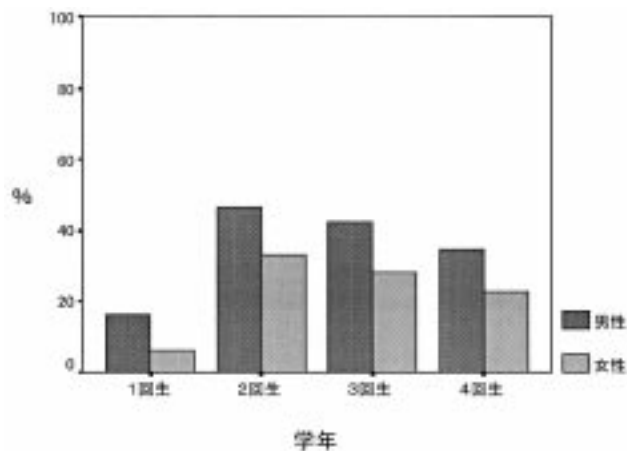


図7 運動する者の割合

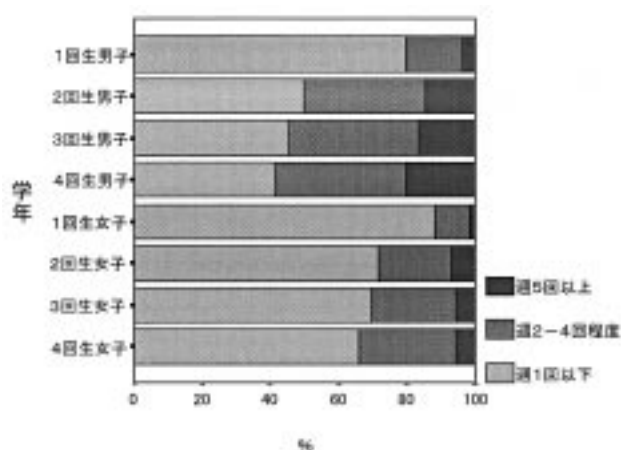


図6 欠食状況の分布

運動

図7は定期的に運動する者の割合を示している。1回生(入学以前)では男子16.3%,女子6.3%だが,2回生になると3倍以上の男子46.7%,女子32.9%になる。しかし3回生,4回生では逆に減少した。高学年における運動の減少は,研究や就職活動に忙しいからであろうか。なお,文理別では男子が34.0%対35.4%,女子が20.2%対24.8%と,理系の学生のほうがいくらか運動しているようである。

運動する学生の運動頻度は,週1回以下が20.3%,週2~4回が56.9%,週5回以上が22.8%であった。女子で週5回以上の割合がやや少ないものの,学年による運動頻度の差はほとんどなかった。

まとめ

入学して1年の間に喫煙率が大きく上昇する。飲酒は少量であれば健康に資するところもあるが,喫煙の害はあらためて言うまでもない。また住環境が大きく変わり,朝食を抜き,夕食を外で食べて帰ってくる生活になりやすい。しかも意外に運動不足である。

悪しき習慣はいったん身につくと脱するのがなかなか困難である。健康のための節制の効いた生活と,自由な大学生活はあい反することもあるだろうが,楽しみながら健康生活を送れる具体的な示唆を与えることがこれからの課題である。

(医学研究科修士課程 北村哲久,
保健管理センター所長 川村 孝)

随想

日本の木とシリカ粒

名誉教授 佐伯 浩

在職中は研究室（当時農学部林産工学科木材構造学講座）の走査電子顕微鏡で木材組織の観察に明け暮れた。木材の観察面は真新しい安全剃刀で切り出した。粗放ではあるが簡単に結果もよく、多忙の身には好都合であった。専門書から小学生の雑誌までよく引用された拙書『走査電子顕微鏡図説：木材の構造 国産材から輸入材まで』の写真は、剃刀の刃先が開いた木の細胞の造形である。

鋭利な剃刀刃も木材細胞中に鉱物質の塊があると忽ち刃こぼれする。熱帯材の中にはシリカ粒を多く含む種類があり、きれいな切削面が出来ず、これには泣かされた。



シリカ粒は稲や竹には普通に含まれるが、何故か日本産の木材では（温帯産材では一般に）認められていない。ムクノキはキャンパス内のあちこちで見かける馴染みの木であるが、その葉は多量のシリカを含み、ガサガサしていて研磨用にもなる。しかし、ムクノキの木材細胞ではシリカ粒を見出せなかった。

日本の木にシリカ粒が現れないことは、日本の木工芸には幸いであった。工芸品の艶やかな木肌や木像に残る見事な鑿跡を見ると、それを思う。日曜大工などで木の物造りを楽しむ人も多いが、日本の木を使って、削り出した滑らかな木の肌目を愛でてほしいと思う。

（さいき ひろし 元農学部教授 平成7年退官、専門は木材組織学・細胞構造学）

資料

平成12年度京都大学教育研究振興財団助成金交付決定者一覧

京都大学教育研究振興財団による平成12年度第1類（国際交流事業関係）助成金交付決定者は、以下のとおりであった。

1. 第1類第1種（海外派遣）

派遣区分		所 属 部 局 等	職名等	氏 名	主な訪問機関・国等	研 究 題 目 等 (国 際 研 究 集 会 等 名)
若 手 研 究 者	長 期	理 学 研 究 科	助 手	釜 谷 秀 幸	イ タ リ ア (アルチエトリ宇宙観測所)	星団形成における初期質量関数起源の研究
		工 学 研 究 科	助 手	新 戸 浩 幸	ア メ リ カ 合 衆 国 (カリフォルニア工科大学)	固液界面分子挙動と表面間力の分子シミュレーションとその微粒子分散系マクロ物性への展開に関する研究
		化 学 研 究 所	助 手	西 長 亨	ア メ リ カ 合 衆 国 (イリノイ大学)	構造が制御された 共役系オリゴマーの合成と機能に関する研究
	国 際 研 究 集 会 (教 官)	理 学 研 究 科	助 手	森 哲	ス ウ ェ ー デ ン	クサリヘビ類の生物学シンポジウム
		防 災 研 究 所	助 手	清 水 康 生	ス イ ス	RSAI World Congress 2000
		化 学 研 究 所	助 手	白 井 敏 之	オ ー ス ト リ ア	第7回ヨーロッパ粒子加速器会議
		農 学 研 究 科	助 手	由里本 博 也	ア メ リ カ 合 衆 国	ゴードン研究会議微生物によるCⅠ代謝の分子基盤
		工 学 研 究 科	助 手	沖 和 哉	オ ー ス ト ラ リ ア	第27回海岸工学に関する国際会議
		化 学 研 究 所	助 手	東 正 樹	ア メ リ カ 合 衆 国	固体化学に関するゴードン研究会議Ⅰ

派遣区分		所属部局等	職名等	氏 名	主な訪問機関・国等	研 究 題 目 等 (国 際 研 究 集 会 等 名)
若 手 研 究 者	国 際 研 究 集 会 (教 官)	エネルギー科学研究科	助 手	内 田 祐 一	中 華 人 民 共 和 国	2000年アジア鉄鋼大会
		薬 学 研 究 科	助 手	久 米 利 明	ア メ リ カ 合 衆 国	第30回北米神経科学学会年会
		工 学 研 究 科	助 手	高 田 暁	ア メ リ カ 合 衆 国	米国暖房冷凍空調工学会 2001年冬季集会
		アジア・アフリカ 地域研究研究科	助 手	山 越 言	オ ー ス ト ラ リ ア	第18回国際霊長類学会大会内シンポジウム「 霊長類生息地の断片化」
		理 学 研 究 科	助 手	千 葉 剛	ア メ リ カ 合 衆 国	相対論的天体物理学に関する第20回テキ サスシンポジウム
		医 学 研 究 科	助 手	田 中 文 啓	ド イ ツ	欧州胸部外科学会会議（第14回）
		ウ イ ル ス 研 究 所	助教授	三 浦 智 行	ア メ リ カ 合 衆 国	第18回エイズ霊長類動物モデルシンポジ ウム
		ウ イ ル ス 研 究 所	助 手	碓 井 理 夫	ア メ リ カ 合 衆 国	第42回ショウジョウバエ研究会議年会
		医 学 研 究 科	助 手	村 井 紀 彦	ア メ リ カ 合 衆 国	耳鼻咽喉科学研究協会2001年冬季学会
		医 学 研 究 科	助 手	古 田 貴 寛	ア メ リ カ 合 衆 国	第30回北米神経科学学会年会
	フ ィ ー ル ド ワ ー ク (大 学 院 生)	食糧科学研究所	M 2	西 澤 けいと	カ ナ ダ	第 6 回国際植物分子生物学会大会
		教育学研究科	D 3	室 井 み や	ス ウ ェ ー デ ン	第27回国際心理学会
		理 学 研 究 科	D 3	関 崎 秀 一	オ ー ス ト リ ア	合成金属の科学と技術に関する国際会議
		工 学 研 究 科	D 3	鄭 在 薫	ド イ ツ	蓄熱国際会議
		防 災 研 究 所	D 1	安 田 誠 宏	オ ー ス ト ラ リ ア	第27回海岸工学に関する国際会議
		化 学 研 究 所	D 1	齊 藤 高 志	ア メ リ カ 合 衆 国	固体化学に関するゴードン研究会議Ⅰ
		工 学 研 究 科	D 1	宇 野 朋 子	オ ラ ン ダ	国際学会「持続可能な建築2000」
		防 災 研 究 所	D 2	山 下 太	ア メ リ カ 合 衆 国	アメリカ地球物理学連合学会秋季大会
		薬 学 研 究 科	D 3	高 見 新 也	ア メ リ カ 合 衆 国	第30回北米神経科学学会年会
		農 学 研 究 科	D 3	足 立 亨 介	中 華 人 民 共 和 国	第 3 回世界漁業大会
		医 学 研 究 科	D 2	庄 司 剛	ド イ ツ	欧州胸部外科学会会議（第14回）
		薬 学 研 究 科	D 3	衣 斐 督 和	ア メ リ カ 合 衆 国	第30回北米神経科学学会年会
		防 災 研 究 所	D 2	藤 原 了	ア メ リ カ 合 衆 国	アメリカ地球物理学連合学会秋季大会
		農 学 研 究 科	D 3	本 間 香 貴	タ イ	東北タイ天水田稲作地域の土地生産力評価
		総 合 人 間 学 部	D 3	川 端 牧	パ ラ オ	パラオにおける海洋資源の持続的利用： 漁場の認識と利用の変遷から
		文 学 研 究 科	D 2	坂 部 晶 子	中 華 人 民 共 和 国	中国と日本における植民地経験の比較社 会学的研究
		アジア・アフリカ 地域研究研究科	MD 3	加 藤 真里子	タ イ	東北タイ農村における宗教実践とジェン ダー
		アジア・アフリカ 地域研究研究科	MD 3	坂 井 紀公子	ケ ニ ア	地方都市における女性の商業活動に関す る都市人類学的研究

派遣区分		所属部局等	職名等	氏 名	主な訪問機関・国等	研 究 題 目 等 (国 際 研 究 集 会 等 名)
若 手 研 究 者	フ ィ ー ル ド ワ ー ク (大 学 院 生)	アジア・アフリカ 地域研究研究科	MD 3	Lim Boon Hock	バングラデシュ	バングラデシュの製塩産業に関する研究
		農 学 研 究 科	M 2	佐 野 修 司	カザフスタン	カザフスタン共和国乾燥地半乾燥地における土壌窒素の形態と動態
		工 学 研 究 科	D 1	Rijal, Hom Bahadur	ネパール	ネパールの伝統的住宅における温熱環境実測に基づく解析と評価手法
		アジア・アフリカ 地域研究研究科	MD 3	市 野 進一郎	マダガスカル	マダガスカル、ベンティ保護区におけるワオキツネザルの社会関係
		宙空電波科学研究センター	D 2	上 田 義 勝	ノルウェー	北極上空におけるイオン加速・加熱機構解明のための観測・研究
		文 学 研 究 科	D 2	石 川 千 草	アメリカ合衆国	アメリカのコンピュータ開発思想史 コンピュータを人々の生活に普及させた思想の系譜
		総 合 人 間 学 部	D 3	古 川 哲 史	アメリカ合衆国	日本 アフリカ交渉史 明治期より第二次世界大戦期までを中心に
		アジア・アフリカ 地域研究研究科	MD 3	牛 田 敦 子	インド	「北インド・ウッタール プラデーシュ州における地域開発活動」 開発 NGO・ヒマラヤ統合開発協会の理念と実践から
		アジア・アフリカ 地域研究研究科	MD 3	内 藤 直 樹	ケニア	北ケニア牧畜地域社会におけるアリアルというエスニック・アイデンティティの生成過程
		アジア・アフリカ 地域研究研究科	MD 4	小 村 成 樹	タンザニア	農村社会における人口移動に関する人類学的研究
		宙空電波科学研究センター	D 2	古 本 淳 一	アメリカ合衆国	MUレーダー観測による乱流強度推定法の開発
		理 学 研 究 科	D 2	上 野 智 弘	フランス	^3He - ^4He 混合液体における濡れ転移の研究
		ウイルス研究所	D 2	近 藤 則 彦	アメリカ合衆国	チオレドキシン相同遺伝子のクローニングおよびこの遺伝子産物のレドックス制御への影響の検討
1ヵ月		農 学 研 究 科	教授	小 崎 隆	ウクライナ (農業生物工学研究所等)	ユーラシア穀作地帯における土地資源の保持的管理戦略の確立
		医 学 研 究 科	助手	溝 脇 尚 志	アメリカ合衆国 (メモリアル・スローン・ケッティングガンセンター)	強度変調放射線治療 (IMRT) に関する調査研究
		総 合 人 間 学 部	助教授	石 原 昭 彦	アメリカ合衆国 (カリフォルニア大学ロサンゼルス校)	宇宙飛行による神経・筋の可塑性
		理 学 研 究 科	助教授	余 田 成 男	アメリカ合衆国 (ワシントン大学)	対流圏と成層圏の力学的結合過程に関する研究
		人間・環境学研究科	教授	高 橋 義 人	ドイツ, オーストリア フライエス・ドイチェス・ホッホシュテュイスト研究所 ウィーン大学等	日本におけるドイツ文学研究の国際化に関する研究
		原子炉実験所	助手	佐々木 隆之	カナダ (カナダ国立科学院環境技術研究所)	微生物の極微量プルトニウムの測定技術研究
		防 災 研 究 所	助教授	西 上 欽 也	トルコ (ボアジチ大学)	プレート境界断層の深部不均質構造の研究
		経 済 学 研 究 科	助教授	出 口 弘	アメリカ合衆国 (ミシガン大学・サンタフェ研究所)	複雑系としての経済学 エージェント指向アプローチに関する調査研究
3ヵ月		理 学 研 究 科	助教授	田 上 高 広	アメリカ合衆国 (カリフォルニア工科大学)	U_1 Th/He 法による地震断層の活動履歴研究
国 共 同 研 究		工 学 研 究 科	助教授	宇 山 浩	ポーランド (科学アカデミー分子・高分子研究センター)	生体モデル高分子および高分子生体材料の合成に関する研究
		医 学 研 究 科	教授	藤 田 潤	連 合 王 国 (ノッthingガム大学)	がん遺伝子ガンキリンの構造と機能に関する研究
		農 学 研 究 科	助教授	東 辻 宏 明	カザフスタン	カザフスタン共和国南部における農業・鉱工業開発に伴う環境汚染に関する共同研究
		農 学 研 究 科	助教授	舟 川 晋 也	カザフ土地研究所	金属酸化物ナノチューブの形成と機械的性質
		エネルギー理工学研究所	講師	足 立 基 齋	アメリカ合衆国 (ワシントン大学)	計算力学による土の耕うん現象の理論的解明に関する共同研究
国 共 同 研 究		農 学 研 究 科	教授	笹 田 昭	オランダ (ワーヘニング大学)	計算力学による土の耕うん現象の理論的解明に関する共同研究
		農 学 研 究 科	助教授	中 嶋 洋	オランダ (ワーヘニング大学)	計算力学による土の耕うん現象の理論的解明に関する共同研究

派遣区分	所属部局等	職名等	氏 名	主な訪問機関・国等	研 究 題 目 等 (国 際 研 究 集 会 等 名)
国際共同研究	医 学 研 究 科	助教授	秋 口 一 郎	オーストリア (ウィーン大学)	皮質下血管性痴呆に関する分子病理学的研究
研修派遣	附 属 図 書 館	事務官	富 岡 達 治	アメリカ合衆国 トロント公共図書館、トロント大学、 ピッツバーグ大学、カリフォルニア大学、 カリフォルニア州立大学ノースリッジ校	電子ジャーナル等の電子図書館システムの 研修及び共同保存図書館に関する調査
	理 学 研 究 科	技 官	網 田 富士嗣	ドイツ (ゲッチンゲン大学、 マックスプランク研究所)	超臨界流体用の高温高圧発生及び観測技術に関する調査
	防 災 研 究 所	技 官	浅 田 照 行	インドネシア (バンドン工科大学)	地殻変動・地殻構造等の観測精度向上のための 観測機器の開発、観測手法の確立に関する共同観測・研究
留学派遣	総 合 人 間 学 部	2 回生	笹 本 康太郎	アメリカ合衆国 (タフツ大学)	[大学間協定校]
	文 学 研 究 科	D 2	鮎 川 真由美	ドイツ (ボン大学)	"
	文 学 部	4 回生	小 嶋 智 彰	アメリカ合衆国 (カリフォルニア大学リバーサイド校)	"
	文 学 部	2 回生	津 田 明 雅	スイス (ローザンヌ大学)	"
	文 学 部	3 回生	西 田 英 恵	カナダ (トロント大学)	"
	教育学研究科	M 1	金 城 まりえ	ドイツ (フンボルト大学)	"
	法 学 部	3 回生	渡 邊 哲 也	オランダ (ライデン大学)	"
	法 学 部	2 回生	吉 川 武 彦	スウェーデン (ストックホルム大学)	"
	経済学研究科	D 3	進 藤 理香子	ドイツ (フンボルト大学)	"
	経 済 学 部	3 回生	佐 藤 吉 宗	スウェーデン (ウプサラ大学)	"
	医 学 部	1 回生	加賀城 聖 子	オーストラリア (メルボルン大学)	"
	工 学 部	2 回生	劉 新 宇	オーストラリア (ニューサウスウェールズ大学)	"
	工 学 部	4 回生	横 川 隆 司	アメリカ合衆国 (カリフォルニア大学ロサンゼルス校)	"
	工 学 部	4 回生	三 木 賢 二	アメリカ合衆国 (カリフォルニア大学サンディエゴ校)	"
	工 学 部	4 回生	蜷 川 典 泰	オーストラリア (シドニー大学)	"
	工 学 研 究 科	D 1	川 本 裕 子	アメリカ合衆国 (ウイスコンシン大学)	[部局間協定校]
	農 学 研 究 科	M 1	山 田 敬	タイ (カセサート大学)	[大学間協定校]
	人間・環境学研究科	D 2	佐 藤 竜 二	オランダ (ライデン大学)	"
	人間・環境学研究科	D 1	張 新 軍	アメリカ合衆国 (タフツ大学)	"
	人間・環境学研究科	D 1	田 上 裕 子	カナダ (マギル大学)	"
	文 学 研 究 科	D 2	廣 川 智 貴	ドイツ (ハイデルベルグ大学)	"
	アジア・アフリカ 地域研究研究科	MD 2	西 崎 伸 子	エチオピア (アジスアベバ大学)	"

派遣区分	所属部局等	職名等	氏 名	主な訪問機関・国等	研 究 題 目 等 (国 際 研 究 集 会 等 名)
留学派遣	教 育 学 研 究 科	D 1	若 林 身 歌	ド イ ツ (ミュンヘン大学)	[大学間協定校]
	経 済 学 部	3 回生	須 藤 久 貴	ド イ ツ (ミュンヘン大学)	"
	文 学 研 究 科	D 2	國 枝 尚 隆	ド イ ツ (ハイデルベルグ大学)	"

2 . 第 1 類第 2 種 (海外からの学者招へい)

招へい区分	受 入 部 局	招へい学者名	国(地域) 名・所属機関・職名	研 究 題 目
若 手 研究者	理 学 研 究 科	Novoskol'fseva Olga Alexandrovna	ロシア・モスクワ大学・ 常勤研究員	荷電高分子の構造相転移に関する研究
	情 報 学 研 究 科	Seca Gandaseca	インドネシア・ボゴール農科大 学・講師	GIS/GPS を用いた熱帯林管理と持続的森 林生産システムの開発
	化 学 研 究 所	Roland Stragies	ドイツ・ベルリン工科大学・ 研究員	求核触媒を用いる選択的反応
一 般	文 学 研 究 科	James R. Anderson	連合王国・スターリング大学・ 上級講師	霊長類の社会的知性に関する実験的研究
	経 済 学 研 究 科	Gunter Heiduk	ドイツ・デュイスブルク大学・ 教授	東アジアとヨーロッパにおける新経済空間 形成のダイナミクス
	アジア・アフリカ 地域研究研究科	Kapepwa I. Tambila	タンザニア・ダルエスサラーム 大学・助教授	現代タンザニアの経済と社会・文化の動向 に関する研究
	理 学 研 究 科	Townsend P. Kingsley	連合王国・ケンブリッジ大学・ 教授	超対称な弦および膜の理論の研究
	工 学 研 究 科	Robert J. Frosch	アメリカ合衆国・パーデュー大 学・助教授	鉄筋コンクリート建物の柱・梁接合部の耐 震性能に関する研究
	高等教育教授シス テム開発センター	Jose Alejandro Ramirez	メキシコ・プエブラ＝アメリカ 大学・教授	大学教育評価の長期的指標に関する研究 新制大学の歴史的検討を手がかりとして
	エネルギー理工学研究所	Charles A. Lewinsohn	アメリカ合衆国・パシフィック ・ノースウエスト国立研究所	有限要素法を用いた高温用セラミックス接 合に関する研究
	化 学 研 究 所	Zenat Adeeb Nagieb	エジプト・国立研究センター・ 教授	バクテリアセルロースの生合成過程におけ る構造制御に関する研究
	農 学 研 究 科	Bosoon Park	アメリカ合衆国・農務省農業研 究所・主任研究員	マルチスペクトル画像による農産物品質の 非破壊検査技術の開発と研究
	工 学 研 究 科	Richard Gerard Wan	カナダ・カルガリー大学・ 準教授	微視的構造を考慮した砂の構成モデルと液 状化解析
	理 学 研 究 科	Daniel Castelli	イタリア・トリノ大学・助教授	大陸衝突帯の比較研究
	理 学 研 究 科	方 明 虎	中華人民共和国・浙江大学・ 教授	遷移金属酸化物の物性と電子相関
国 際 共 同 研 究	人間・環境学研究所	Jenner Gerard	フランス・ルイ・パスツール大 学・教授	超高圧環境における反応制御に関する研究
	理 学 研 究 科	Steven J. Hayward	連合王国・イーストアングリア 大学・講師	タンパク質の機能メカニズムデータベース 作成のための共同研究
	医 学 研 究 科	Hugh Bostock	連合王国・国立神経研究所・ 教授	末梢神経軸索イオンチャネルの分子臨床神 経生理学的研究
	経 済 研 究 所	Robert S. Mariano	アメリカ合衆国・ペンシルヴァ ニア大学・教授	景気循環の時系列分析
	人間・環境学研究所	William C. Cockerham	アメリカ合衆国・アラバマ大 学・バーミンガム校・教授	長寿を支える人間・環境学的要因に関する 国際比較研究
	理 学 研 究 科	D. Karoly T. Shepherd	オーストラリア・モナシュ大学・教授 カナダ・トロント大学・教授	力学・放射・化学過程を通しての対流圏と 成層圏の結合
国 際 共 同 研 究	農 学 研 究 科	Corwin Hansch	アメリカ合衆国・ボモナ大学・ 名誉教授	環境汚染物質の構造 環境動態相関に関す る共同研究

3. その他

(1)国際交流推進事業

【京都大学と海外の学術交流協定締結校との交流事業】

派遣

所属部局	職名等	氏 名	訪問機関・国等	研 究 題 目 等
医 学 研 究 科	助教授	加 藤 伸 郎	フ ラ ン ス (パ リ 第 7 大 学)	シナプス可塑性の分子機構
総 合 博 物 館	教 授	大 野 照 文	オ ー ス ト リ ア (ウ ィ ー ン 大 学)	厚歯二枚貝から解明する白亜紀末大量絶滅事件
教 育 学 研 究 科	教 授	鈴 木 晶 子	オ ー ス ト リ ア (ウ ィ ー ン 大 学)	J.F. ヘルバルトのオーストリア教育学・思想に与えた影響に関する思想的研究
生 命 科 学 研 究 科	助 手	井 川 善 也	オ ー ス ト リ ア (ウ ィ ー ン 大 学)	グループⅠリボザイムの機能解析

招へい

受 入 部 局	招へい学者名	国(地域)名・所属機関・職名	研 究 題 目 等
文 学 研 究 科	Marie-Claude Paris	フランス・パリ第7大学・教授	現代中国語の統語構造と情報構造に関する研究
総 合 人 間 学 部	Frederique Lab	フランス・パリ第7大学・助教授	時制の英仏対照研究
文 学 研 究 科	F. Marmande	フランス・パリ第7大学・教授	フランス現代文学と文化
工 学 研 究 科	Semenova Olga	オーストリア・ウィーン大学・助教授	金属間化合物の物理化学と高温熱化学
文 学 研 究 科	Christine van Baalen	オーストリア・ウィーン大学・講師	オランダ語のモダリティの意味・語用論的研究
人 文 科 学 研 究 所	Sepp Linhart	オーストリア・ウィーン大学・教授	19世紀殊に天保から明治初期にかけての日本の文化・社会史
ウ イ ル ス 研 究 所	Bruno Chatton	フランス・ルイ・パスツール大学・(ストラスブール第1大学) 助手	転写因子 ATFaの研究
ウ イ ル ス 研 究 所	Michel Koenig	フランス・ルイ・パスツール大学・(ストラスブール第1大学) 教授	フリードリヒ、アタキシアの発症分子機構の解析
ウ イ ル ス 研 究 所	Patrick Dufour	フランス・ルイ・パスツール大学・(ストラスブール第1大学) 教授	癌の分子標的治療の研究

【日本留学フェア関連事業】

所属部局	職名等	氏 名	国名・実施場所等	実 施 内 容 等
工 学 研 究 科	教 授	中 條 善 樹	ベトナム・ホーチミン市 タイ・バンコク市	日本留学フェアにおいて、京都大学への留学を希望する学生等に対する情報提供及び関連情報収集

【桂キャンパス構想の推進に向けた海外の大学の実態調査事業】

所属部局	職名等	氏 名	国名・実施場所等	調 査 内 容 等
工 学 部 等	事務官	井 尻 恒 博	中 華 人 民 共 和 国 (香港科学技術大学)	最新電算システムの導入、施設整備・環境整備大学の研究活動と産業界との関わり
工 学 部 等	事務官	青 木 一 弘	中 華 人 民 共 和 国 (香港科学技術大学)	学生へのサービス及び基盤整備、大学教育等と事務職員の連携、福利厚生施設の管理運営
工 学 部 等	事務官	藤 田 悟	ア メ リ カ 合 衆 国 (スタンフォード大学、ペンシルバニア州立大学)	施設整備・環境整備、大学の知的財産の管理、教員の兼業、人事管理システム
工 学 部 等	事務官	湯 浅 純 明	ア メ リ カ 合 衆 国 (スタンフォード大学、ペンシルバニア州立大学)	経理関係事務システム、大学の知的財産と産業界の関わり、福利厚生施設の運営管理
工 学 部 等	事務官	小 西 久 子	ア メ リ カ 合 衆 国、カナダ (コロラド大学、マギル大学)	最新の研究支援業務、大学と地域社会や産業界との連携

【APRU（環太平洋大学協会）／AEARU（東アジア研究型大学協会）関連事業】

所属・職名	氏 名	渡航目的国 (地 域 名)	主 な 訪 問 機 関	派 遣 目 的
総 長	長尾 真	カ ナ ダ	ブリティッシュコロンビア大学	第4回 APRU 年次総会に出席のため
情報学研究科 教 授	池田 克夫	カ ナ ダ	ブリティッシュコロンビア大学	第4回 APRU 年次総会に出席のため
工学研究科・附属 環境質制御研究セ ンター助教授	清水 芳久	タ イ アメリカ合衆国	チュラロンコン大学 ワシントン大学	APRU フェローズプログラムに参加のため
経済学研究科 教 授	八木紀一郎	日 本	大 阪 大 学	第6回 AEARU 年次総会に出席のため
情報学研究科 教 授	池田 克夫	中華人民共和国	清 華 大 学	AEARU 主催のウェブテクノロジーワークショ ップに参加のため
情報学研究科 助 手	八木 啓介	中華人民共和国	清 華 大 学	AEARU 主催のウェブテクノロジーワークショ ップに参加のため
工 学 研 究 科 教 授	加藤 直樹	中華人民共和国	北 京 大 学	AEARU 主催のコンピューターサイエンスワー クショップに参加のため
文 学 研 究 科 教 授	吉田 城	日 本	東 京 大 学	AEARU 主催のカルチュラルワークショップに 参加のため
人文科学研究所 助 教 授	大浦 康介	日 本	東 京 大 学	AEARU 主催のカルチュラルワークショップに 参加のため
生命科学研究科 教 授	佐藤 文彦	大 韓 民 国	浦 項 工 科 大 学	AEARU 主催のバイオとバイオテクノロジーワー クショップに参加のため
理 学 研 究 科 助 手	真壁 和裕	大 韓 民 国	浦 項 工 科 大 学	AEARU 主催のバイオとバイオテクノロジーワー クショップに参加のため
生命科学研究科 助 手	大和 勝幸	大 韓 民 国	浦 項 工 科 大 学	AEARU 主催のバイオとバイオテクノロジーワー クショップに参加のため
エネルギー科学研究科 教 授	笠原三紀夫	中華人民共和国	香 港 科 学 技 術 大 学	AEARU 主催の環境とエコロジーワークショッ プに参加のため
エネルギー科学研究科 助 教 授	東野 達	中華人民共和国	香 港 科 学 技 術 大 学	AEARU 主催の環境とエコロジーワークショッ プに参加のため
経 済 学 部 4 回 生	栗山 倫子	中華人民共和国	香 港 科 学 技 術 大 学	AEARU 主催の学生キャンプ参加のため
経 済 学 部 4 回 生	原井 尚	中華人民共和国	香 港 科 学 技 術 大 学	AEARU 主催の学生キャンプ参加のため
工 学 部 3 回 生	岡田真理子	中華人民共和国	香 港 科 学 技 術 大 学	AEARU 主催の学生キャンプ参加のため
工 学 部 3 回 生	小谷 優佳	中華人民共和国	香 港 科 学 技 術 大 学	AEARU 主催の学生キャンプ参加のため
文 学 部 4 回 生	井上 敬子	日 本	東 京 大 学	AEARU 主催の学生キャンプ参加のため
文 学 部 4 回 生	福本 拓	日 本	東 京 大 学	AEARU 主催の学生キャンプ参加のため
文 学 部 3 回 生	岡山 文子	日 本	東 京 大 学	AEARU 主催の学生キャンプ参加のため

(2)学術研究活動推進事業

【共同研究・シンポジウム】

研究代表者所属部局	職名等	氏 名	研 究 題 目 等
総合情報メディアセンター	教 授	美 濃 導 彦	京都大学とUCLAとの遠隔講義に関する共同研究
工 学 研 究 科	教 授	松 重 和 美	ナノ工学に関する共同研究
工 学 研 究 科	教 授	森 島 績	金属酵素蛋白質の分子生化学に関する国際共同研究
工 学 研 究 科	教 授	牧 野 俊 郎	エネルギーと環境に関する共同研究
経 済 学 研 究 科	教 授	堀 和 生	日本韓国経済協力と経済発展に関する国際共同研究
木 質 科 学 研 究 所	助教授	小 松 幸 平	中・大規模集成材構造建築物における接合法に関する共同研究
医 学 研 究 科	教 授	和 田 洋 巳	京都大学及びルイ・パスツール大学国際交流10周年記念シンポジウム
原 子 炉 実 験 所	助教授	河 合 武	中性子源としての原子炉のさらなる高度利用に関するシンポジウム
人 文 科 学 研 究 所	教 授	横 山 俊 夫	現代科学術語再検討国際シンポジウム準備会議

話題

生態学研究センター
センター内公開・講演会
「生態学って何？」の開催

生態学研究センターでは、3月24日（土）午前10時から午後5時まで、「生態学って何？」をテーマとし、主として地域住民を対象にセンター内公開と講演会を開催した。



センター内公開では、「魚の形と食べ方の分化」、「ミジンコの役割」、「虫と植物の不思議な関係」などをテーマに、シンバイオトロン実験装置をはじめ実験室を公開し、研究成果のパネル展示、ビデオの放映、魚の観察、圃場・林園の見学会などを催し、約150人の参加があった。

また講演会では、午後2時から地域を課題にした次の2講演が行われ、約90人が聴講し、それぞれ質疑応答等活発な意見が交換された。

「琵琶湖の生き物をさぐる」

助教授 占部城太郎

「里山が語るもの」

日本学術振興会特別研究員 丑丸 敦史

（生態学研究センター）

公開講座

京都大学春秋講義（春季講座）

本学では、財団法人京都大学教育研究振興財団の助成を得て、平成13年度「京都大学春秋講義（春季講座）」を下記のとおり開講します。

記

会 場 月曜講義：法経第二教室
水曜講義：キャンパスプラザ京都（京都駅前中央郵便局西側）
時 間 午後6時30分～8時
開 講 日 程

月曜講義（5回シリーズ） テーマ『豊かな人の世に向かって』

開 講 日	講 師 名	テ ー マ
5月14日	教育学研究科 助教授 皆藤 章	人間のころについて考える
5月21日	工学研究科 教 授 外山 義	人生を最期まで歩み切るために
5月28日	医学研究科 教 授 中村 孝志	骨と関節の損傷はどこまで治せるか
6月4日	薬学研究科 教 授 赤池 昭紀	脳と眼を守るくすり
6月11日	経済学研究科 教 授 堀 和生	アジアの発展と豊かなくらし

水曜講義

開 講 日	講 師 名	テ ー マ
5月16日	理学研究科 教 授 上野 健爾	数とは何だろうか
5月23日	教育学研究科 教 授 山崎 高哉	教育・学習・人生 生涯学習のすすめ
5月30日	医学研究科 教 授 光山 正雄	今何故細菌の逆襲か
6月6日	文学研究科 教 授 岩城 見一	コスミック・アートへの誘い
6月13日	農学研究科 教 授 野田 公夫	農業・食糧問題からみた世界と日本

受 講 定 員 月曜講義：180名（本学受講者の定員枠30名）

水曜講義：250名（同 上）

受 講 資 格 特に問いません。

受 講 料 無 料

申 込 方 法 本学教職員及び学生が受講を希望する場合は、所属部局の事務担当掛へお申し込みください。

申込締切日 4月30日（月）

問 合 せ 先 研究協力部研究協力課（TEL 753-2041）

今回は、会場が学内（月曜講義）と学外（水曜講義：キャンパスプラザ京都）に分かれます。

終了報告

教育学研究科附属臨床教育実践研究センター
第4回リカレント教育講座
『『心の教育』を考える 衝動的な子どもたちを巡って』

臨床教育実践研究センターでは、平成9年の設立以来毎年1回、学校教育現場等で子どもにかかわる専門家を対象とする「リカレント教育講座」を開催してきた。第4回目にあたる今回は、子どもの衝動性の問題を取り上げ、おとなしい子どもが突然“キレ”る、学校内外で非行を繰り返す、教室で着席してられない、といった今日的な問題をテーマに、事例検討会とシンポジウムが行われた。100人の定員を上回る計126人の現職教諭やスクールカウンセラーが参加し、熱心な討論が行われた。

日時・講師は以下のとおり。

2月16日（金） 事例研究 13：00～17：00

「不登校・多動・非行 衝動的な子どもたちを巡って」

講師	第1分科会 福井 康之（神戸女子大学教授） 岡田 康伸（教 授）
	第2分科会 岩宮 恵子（オフィス岩宮） 皆藤 章（助教授）
	第3分科会 東山 紘久（教 授） 桑原 知子（助教授）
	第4分科会 山中 康裕（教 授） 伊藤 良子（教 授）

2月17日（土） シンポジウム 9：00～12：00

「衝動的な子どもたち」

シンポジスト	「精神科医の立場から」 山口 直彦（兵庫県立光風病院長）
	「臨床心理士の立場から」 岩宮 恵子（オフィス岩宮）
	「法律家の立場から」 瀬戸 則夫（いぶき法律事務所）
指定討論者	「社会学の立場から」 徳岡 秀雄（教 授）
司会	山中 康裕（教 授）

（大学院教育学研究科）